

獅子と鷺

山牧田 湧進



【まえがき】

※【ご注意ください】

- ・この作品はフィクションです。実在の人物・地名・団体等とは一切関係ありません。
- ・この作品は成人ゲイ向け官能小説であり、男性同性愛を語っています。同性愛に嫌悪感を抱く方はご覧にならないよう、お願い申し上げます。
- ・この作品は表現の誇張、強調や省略のある、必ずしも現実には即していないファンタジーであることをご了承ください。
- ・特に作品中の性的描写は、現実の性交渉における性病等のリスクを意図的に排除しています。現実と混同しないよう、ご注意願います。
- ・この作品は想像して楽しんでいただくものです。現実との区別を付けられず、犯罪や迷惑行為に及ぶ危険のある方はご覧にならないでください。

【あらすじ】

ひよんなことから、まだ結婚のケの字も考えたことすらない若者の元に預けられたのは第二次性徴を直前に控えた二人の三七四五。

自身の名前に良い思い出を持っていない二人は四股名に入りたいという言葉そのまま普段の呼称に使うことにした。

獅子と鷺。

若者の前で第二次性徴を迎えた獅子と鷺は、その若者がきっかけで性に目覚めたと言い、しかし、単純に性交渉を強請るわけにもいかないことを勉強した二人は若者に対して「動かないで」「なすがままにされてくれ」と懇願する。

【目次】

4



奥付

●

•

•

●

•

•

•

•

•

•

•

•

●

●

•

•

•

•

•

•

•

•

1

1

1

•

1

1

1

1

1

•

27



獅子と鷺

第1章

僕は生まれて此の方ずっと独身ではあるのだが、なんて言い方をするとまるでもう結構な歳であるかのように受け取られてしまうかもしれないが、今現在では勿論のこと、結構昔の時代にまで遡ったとしても今の僕の年齢で結婚を経験している人は少ない。まだそんな年齢だ。

十分に青年、むしろ、ようやくと青年の仲間入りを果たしてまだまだ若輩者といったところなのだが、いろいろと理由あって、二人の三七四五を引き取って育てることになった。

同い年だが縁えんも縁ゆかりも無いばらばらな二人。

鶏が先か卵が先だったか最早ぐちゃぐちゃで自分でも分からなくなってしまうが、二人は僕が教えている道場に通おうとしていて、どうせなら教えるだけじゃなくて生活を共に、つまり、育ててみては？ という話に行き着いたのだ。

父親なんて柄じゃないし、そもそも結婚のケの字すら掠ったことも無いこの僕

が子育てなんて考えたことすらあるわけがないのだが、存外にも二人ともすぐに僕に懐いて、まず真っ先にこの二人が僕と生活を共にすることに対して積極的な姿勢を明確に示したために『まずはお試し』じゃないけれど、とりあえず一緒に暮らしてみようか、ってなって現在に至る。

二人にはそれぞれ本来の名があるわけだが、あ、そうそう、僕が教えている道場というのは相撲道場で、相撲といえば四股名というものがあって、付けるとしたらどんな四股名が良い？ って二人に聞いたりして、なんやかんやで、その四股名に入りたいと言う言葉がそのまま普段の呼称になった。

というのも、二人ともあまり自分の名前について良い印象や良い思い出が無いから、ってことが大きかったからだった。

一人は『獅子』。

四股名の話をしていたときに『俺？ レオ！ オレオレオレオレオレオ

レ……』ってふざけてたんだけど、『レオ』を四股名にするのはちよつとまだ時代の先端を行き過ぎてるかな？ ってなって『獅子』と呼ぶことに落ち着いた。

実際のところ、見た目的にはライオンとか獅子とか言うよりも、獅子舞のお面にちよつとだけ似た感じでキュートでチャージングで、ちよつぱり芋っぽい感じもある子だ。

決して細っこいわけではないが、太ましいというほど太くもなく、もったりした感じの身体つきだがシルエツト的には割と脚長にも見えるバランスをしていて、いつも肌とか脇腹とか二の腕とか頬っぺたとか口唇が艶っツヤ・プルップルしている。

もう一人は『鷺』。

僕はちよつと珍しいと思うってしまったのだが、この子は自分の一人称を『わし』と呼んでいたのと、もう一人が『おれおれ』言っていたので、『おれ』が『レオ』で『獅子』になったんだから『わし』もそのまま『鷺』で良いのでは？ と

いう流れになって本人もそれで納得していたので『鷺』と呼ぶことになった。

ただ、実は見た目は全く鷺ではなくて、どちらかというと熊っぽい。

腕も足も胸も腹も全部太いし、首も太い。

瞳も猛禽類のような鋭さはあまり無くて、基本優しい可愛い目だし、獅子に比べると随分と大人しい印象だ。

凄く色白でほんのり赤みが差すお餅みたいな子で、いつも艶っツヤしている獅子に対して、鷺は光沢の少ないマットな白だ。

にしても、自分もまだまだ全然若いつもりでいたが、二人とも超若くて飛び跳ねるように元気が良い。

獅子と鷺は仲も良いのだが普段からお互いをライバル視していて、何かとやらと競い合う。

相撲道場でもやたらと張り合うので、結果的には無茶苦茶稽古を頑張る子達に

なっている。

へロへロになって、やっとこさ風呂場に向かうのだが、風呂入っている間にすっかり元氣を取り戻す。

きやつきやつきやつき騒ぎ出して、バタバタと動き回り、座って身体を洗っている僕に体当たりを噛まして来るのだ。

「うわあ先生のお腹大っきい!」「すべすべ」「つるつるだあ」

背後から、もしくは横から抱き着くように突進してくるので、だいたい片手は背中、もう片手は僕のお腹に回って来るのだが、どうも二人ともこの僕の大きなお腹が氣になるらしく、どれほど意識しているのか知らないけど、妙に僕のお腹を弄る手付き。^{まさぐ}

すべすべとかつるつると言うのは多分身体を洗っている最中だから洗剤で滑っているだけだと思うんだけどな。

良く分からないけど、もしかしたら僕の大きなお腹に父性みたいなものを感じていたり、するのだろうか。

ちゃんこはいつも大食い競争になって、二人ともまあとにかく食べる食べる食べまくる。

自分と比べると、あ、すみません、自分ほとんどの人より主に横にデカイので比較に向いていませんでした。

二人ともまだまだ成長期で絶対的には身体もまだまだ小さいのに、良くもまあこんなに食えるものだと思回感心する、のだが、恐らく自分も十年くらい前はそんな感じだったのだろうと思うので思わず自分を引き合いに出してしまいました、今の自分より食うぞこいつら。

そんなこんなで就寝、の前にもう一度風呂に入る。

最近では公的な施設を私的に使用することについてかなり厳格な世の中になっているかと思うが、今のところこの相撲道場では利権、ではなく実は風呂の掃除を他の誰もしないのでなし崩し的に僕がすることになっていて、そのバーター

でついに残り湯に浸かってシャワー浴びるくらいは目を瞑りましょう、という感じに落ち着いているのだ。

いくら僕が横に大きいからといって、相撲道場の風呂に一人で入るのは例え残り湯だとしても少々広過ぎる贅沢な空間となるのだが、この二人も掃除することを条件に入れてやれることになったので、大きい家族風呂と言え言えなくもない程度の空間密度に収まった。

稽古終わりの他のメンバーが居る中でも僕にアタックしてくるくらいだから、(二人にとって)邪魔者が居なくなつた三人だけの風呂ではそれはそれはもう、獅子と鷺は僕に戯れ付いてなかなか離れない。

僕の身体を撫で回しながら、

「先生デッカクて良いなあ」「わしも先生みたいになりたい」

と、嬉しいことを言ってくれたりするのだが、あんまりにもベタベタしてくる

ものだから、時折意図しなくてもヒャンと気持ち良い刺激を受けてしまうことがあって、思わずうっかり反応でもしちゃうったりしないかと身構える。

別に二人は僕の股間を狙ったりとかはしてこないのだが、たまたま絶妙なタツチで素肌を滑ったりなんかするだけでもゾクッと来ることはあるからね。

うう、いかんいかん。こんなシチュエーションでうっかりおっ勃ててしまったりでもしたら間違いないく事案である。

(こちらは体験版です)

第2章

性の目覚め

(こちらは体験版です)

第3章

うっかり勃起

(こちらは体験版です)

第4章

三七四五越痴

(こちらは体験版です)

開発

第5章

(こちらは体験版です)

卒業

第6章

(こちらは体験版です)

第7章

再会そして

(こちらは体験版です)



獅子と鷺

三七四五越痴

| | |
|-------------|--|
| OpusNo. | Novel-093 |
| ReleaseDate | 2025-12-19 |
| CopyRight © | 山牧田 湧進 |
| & Author | (Yamakida Yuushin) |
| Circle | Gradual Improvement |
| URL | gi.dodoit.info |

個人で楽しんでもいただく作品です。

個人の使用範疇を超える無断転載やコピー、
共有、アップロード等はしないでください。

(こちらは体験版です)